

令和5年度 北部地区子ども支援net 議事録

日時：令和5年6月16日（金） 13：30 ～ 16：00

場所：龍郷町りゅうがく館 講堂

参加者：50名（※詳細は別紙）



1. 開会あいさつ

龍郷町子ども子育て応援課

2. 自己紹介

3. 資料説明及び事業報告

奄美地区地域自立支援協議会（子ども部会、子ども支援net）について

4. ミニ研修

「発達支援における保護者との連携について」

鹿児島大大学院臨床心理研究科 准教授 高橋 佳代 氏

保護者との連携の基本

- ①自己決定の支援を
答えを出すより一緒に考える
- ②まずはしっかり聴く
保護者の言い分、訴えを否定しない
- ③現状の子どもの理解は伝える
(決めつけない)
- ④組織で対応
一人が抱え込まない。重要なことは契約時に話ができるよう情報を共有
- ⑤関係機関との連携
上手に外観との連携しる受け取りを

※保護者を変えようとするのが難しい。変えられないこともある。「できることしかできない」をえられた療育の時間を最大限に子どものために使うという発想も持っておく

<感想・質問>

◎保護者（困り感が薄い）に、子どもの心配なことをお伝えしても「大丈夫」と、返事が返ってきて、支援が行き詰まってしまう場合の対応について

※そのタイミングにならないとつなげられないこともある。保護者が困り感を訴えてきたタイミングで支援につなげられるように準備だけはしておくことも大切。

- ・実際に困っていないこともあるが、親だから「困ってはいけない」と思っている場合もある。
- ・具体的な場面（行事、食事、身の回りの事など）で、今、こどもが行えている状況を把握することも大切。
- ・指示は理解できていないが、周りを見て動いている子の場合、おとなしく、周りの手助けを受け入れられていたり、あまり集団を乱さないため、保護者も積極的に困らないという事もある。
- ・その子の強みや、現在困っていない背景を押さえておくことが必要。
- ・今のうまくいっている環境がずっと続くわけではないということが心配なので、繋がってほしい時には、（小学校への進学など）具体的な場面をお伝えして、支援を一緒に考えることが大切。

◎面談時に記録をしていると覗き込む保護者がいる。面談時の記録はどうしたらよいか。

※見られても困るものではないという事を理解していただくことが大切。

- ・面談者の記録が気になる方は実際にいる。逆に記録を取らないと不安になる方もいる。
- ⇒記録を取る際には、記録を取ってよいか確認してから記録を取るのがよい。
- ⇒逆に、保護者に見るように机に置いて、話されたことを一緒に確認しながら、記録するのも一つの方法。

5. グループワーク

「奄美北部での障がい児やその家族を支える人たちの連携について」

1グループ



- ・ 関係機関のネットワークを構築により、支援者が孤立しない仕組みをつくるのが大切。
⇒顔の見えるネットワーク、話し合える場、移行支援シートなどの活用
- ・ 龍郷町は、町独自の「龍郷支援net」を年2回開催。
⇒具体的な支援ができるように、関係者で共有するようにしている。意見交換することで、お互いの顔が分かり、活動や困り感を共有することができる。

2グループ



- ・ 多動などで目につきやすい子への支援は入りやすいが、それ以外で、本当に支援が必要な方への介入が漏れていないか気になる。
- ・ 気になることを気付ける環境づくりが大切。
- ・ 個別支援をするにあたって、地域の理解を得ながら支援体制を作っていく必要がある。
- ・ 関係機関が、現在ある、ネットワークや相談支援体制を理解していることが大切。
- ・ 支援者の底上げや、ネットワーク基盤を整え、お互いが理解しておくことが大切。

3グループ



- ・ 連携の取り方について（学校と、療育施設との連携）
- ・ 学校と情報共有しながら進めていくことが大切。（宿題などをどの程度学童で行うか）
⇒連携のための連絡体制づくり（電話連絡など）
- ・ コロナがあけ、里帰り出産が増え、困難事例も増えている。
- ・ 困り感がない保護者への支援について。
- ・ 市町村保健師、保健所など、情報共有のツール共有、システムができればよい。
- ・ リレーファイルの活用も大切。

4グループ



・北部地区は学校の人数が少ないので、把握しやすく、対応が手厚いというメリットがあるが、療育事業所が少ないというデメリットもある。

- ・北部に保護者が選べる施設が増え、もっと小さい頃から、療育施設に通えたらよい。
- ・施設情報公開の場や施設間で情報交換をする機会が増えればよい。
- ・地域に根差した関係機関同士の「顔の見える関係」ができることで、連携がうまくできていくのではないかな。
- ・地域性もあり、療育事業所に通所してもらうためには、親のフォローも必要。
- ・資源がない中で、ないなりのケアをどうしていけばよいか。
- ・関係機関（療育、学校、保育所など）をつなげていくことで、連携ができてくるのではないかな。

5グループ



- ・保育所等訪問の支援の実態について共有（好事例や、感じている課題）
⇒幼児期の介入はスムーズになってきたが、学童期の介入が難しい。（学童期も切れ目のない支援が必要）
- ・北部に医療的ケア児の対応ができる事業所が出来たらよい。
- ・新1年生になる前に、学校から事業所や保育所に見学に来てくれたのは良かった。（移行シートの引継ぎだけでなく、実際に見てもらうのが良い。）
- ・子ども支援netの実態を知らない現場の職員もいる。参加者が、もっとほかの人にも知らせていく必要がある。

6グループ



- ・北部はコミュニティがしっかりしている。地域の方の目もあり、気になる子どもについては必要な時には、連絡があり、ケース検討会が開催されるなど見守り体制ができている。
- ・親子教室への参加について、保護者に伝えるが、あと一歩が踏み出せないことがある。（どう伝えたらよいか）
- ・小学校側が幼児期の施設へ見学に行く機会が増えた。そのため、深く関わる必要性についても理解されてきた。
- ・放デイ利用児への支援について、送迎時に話にはできるが、細かくは話せない状況がある
⇒夏休みなど、事業所見学を実施してもらえば、子どもの事を理解し、支援の幅が広がるのではないかな。
- ・療育施設の不足によりつなげたいけれど、つなげないという状況がある。
- ・「奄美地区障害児者支援システム図」の内容を知る場所があってもよい。

7グループ



- ・福祉と教育の連携について（保育所等訪問の際に壁を感じる）
- ・施設としては見学対応している。学校から見学に言ったり、お互いに情報交換をしていけたら良い。
- ・保護者が一番困る場面は就学前が多いため、もっと早い段階でつなげられたら良い。（家庭では困っていないくても、集団場面の様子を見る機会があればよい）
- ・精神科へ、中高生など若い相談者が増えている。幼児期から困り感を抱えて成長しているのが見えてくる。
- ・大きくなったら、対応しにくくなる。小さいうちに気付いて、みんなで関わっていけたらよい。
- ・リレーファイルを活用していけたら良い。

8グループ



- ・就学前に、子どもの実態と保護者の理解に乖離がある場合、支援者間で伝えるための準備のしておくことで、うまくいったケースもある。
- ・中高生のゲーム依存の相談が増えている（病院）
- ・学校や関係者が、相談窓口を知っているのと知らないのでは違いがある。
- ・学校内で、診断がなくても、支援学級にいたり、通常学級でグレーゾーンで困り感がある子どももいる。保護者が受け入れるまでどのような支援をしていく必要があるかが悩み
- ・子どもへの支援では、初回の介入が大切
- ・保護者として、受け入れるまでには、時間がかかる。「一緒に考えていきましょう」と言う言葉は安心感になる。支援者の言葉一つで保護者の気持ちは変わってくる。
- ・実際のサービスを見学に行きたい。（ネットワークができることで、協力連携体制が出来たらよい。